

第五篇目再考

林 佳恵

第一節 はじめに

一九七四年に大淵忍爾氏によって紹介された¹、敦煌寫本P二八六一・二＋P二二五六に保存されている靈寶經の目録²（以下、敦煌本「靈寶經目録」と記す）は、古靈寶經研究にとって貴重な資料であるが、テキストとしては巻頭の破損による内容の欠損をはじめとするテキスト自体の問題が幾つか存在する。周知のようにこの目録は二部構成になっており、その前半が「元始舊經紫微金格目三十六卷」と記された、「元始舊經」の目録とされる部分で、これは十篇目に分けて經典が著録されている。その中の第五篇目の記述内容に関して、そこに見える「未出一卷」に該当する經典や、第五篇目全体の記載經典の種類と巻数の解釈をめぐり、幾つか先學による解讀がなされている。そこで問題となっているのは、主に第五篇目の、1. 著録經典の種類、2. 著録經典の已出・未出の巻数、3. 著録經典に該当する現行本の推定等であるが、それらの記述内容についての解釈は未だ完全には一致していない。第五篇目は靈寶經の戒律に関わる經典を著録した部分であり、今後、これまで靈寶經の研究においてまだ十分には研究されていない戒の問題を扱う上でも、第五篇目の内容を明確にしておくことは必要であろう。そこで本稿では、先ずこれまで諸先學によって試みられた第五篇目の内容の解釈について、その問題点を含めて整理した上で、筆者の試みとして、敦煌本「靈寶經目録」前半部分の「紫微金格目」の記載の原則に照らして、改めて第五篇目部分を復元し、それに基づいて記述内容を解讀したいと考える。

第二節 先行研究における解讀

先ず第五篇目の記述内容に關する先學の解釋を紹介する。その前に、問題の第五篇目部分の寫本の内容を原文の通りに示し、本稿でこの部分の句讀の切り方や内容の解釋について述べる際に参照するものとする。

〔第五篇目部分の記述³〕

智慧上品大⁴誡三卷二卷已出卷目云太上洞玄靈寶智慧罪根上品二卷
未出一卷篇目云太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然二卷已出一卷
目云太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然眞一經一卷目云太上靈寶
長夜九幽府玉匱⁵明眞科
右一部六卷第五篇目皆金簡書文宋法師云合六卷明戒律之差品

（一）大淵忍爾氏の解釋

大淵氏は第五篇目について、以下のように讀解している⁶。（『』は經典名、（）内は大淵氏が補って讀んだ部分を示す。）

1. 『智慧上品大誡』三卷、二卷已出。未出一卷。
「卷目」云、『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』二卷。
2. 「卷目」※云、『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』二卷、已出一卷、（未出一卷）。
3. 「（卷）目」云、『太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然眞一經』一卷、（已出一卷）。
4. 「（卷）目」云、『太上靈寶長夜九幽府玉匱明眞科』（一卷、已出）。

二番目の※印を付けた部分は原文では「篇目」になっているが、大淵氏はこれを「卷目」の誤記としている⁷。大淵氏のこの讀み方に従って第五篇目の内容を見ると、著録經典は四種類、卷數の内訳は「已出」五卷、「未出」二卷の計七卷となり、目録にある「右一部六卷第五篇目」と卷數が一致しない。大淵氏は第五篇目のこの解釋に基づいて、十篇目の各部の卷數を算出し、「紫微金格目」は「已出」二〇卷、（これに第四篇目の「諸天内音玉字、一卷、已出。今分爲二卷」と見える一卷の増卷分

と、第一篇目の『赤書玉訣』⁸一卷が二巻に分成したと推定した一卷を加えても）分巻して二二巻、「未出」一六巻であるとする。これは敦煌寫本中の「紫微金格目」の「已出」二二巻、分巻して二三巻、「未出」一五巻と合致しない。大淵氏はこのような「已出」・「未出」の巻数の不一致が生じた理由として、寫本筆者による「未出」を「已出」と誤記した可能性と、陸修静の數え間違いの可能性を挙げる。大淵氏の解釋では、第五篇目の著録經典に該當する現行本は、以下のようになる。

	第五篇目著録經典	該當する現行本
1	太上洞玄靈寶智慧罪根上品 (已出) 二卷	太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經 (HY四五七)
	(『智慧上品大戒』の未出一卷)	
2	太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然 (已出一卷)	太上洞玄智慧上品大戒 (HY一七七)
	(未出一卷：經題不明)	
3	太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然眞一經 (已出一卷)	(『正統道藏』未収)
4	太上靈寶長夜府九幽玉匱明眞科 (已出一卷)	洞玄靈寶長夜之府九幽玉匱明眞科 (HY一四〇〇)

(二) 小林正美氏の解釋

小林氏も大淵氏と同じく、第一篇目で『赤書玉訣』一卷が「卷目」で二巻に分成したと推定した上で、以下のように第五篇目を解讀する⁹。

1. 『智慧上品大誡』三巻。二巻已出。

卷目云、『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』二巻。未出一巻。

2. 卷目云、『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』一巻。

3. 卷目云、『太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然眞一經』一巻。

4. 卷目云、『太上靈寶長夜九幽府玉匱明眞科』。

小林氏は敦煌寫本原文で、『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』の後にある「二巻已出」の部分进行衍字とし、第五篇目の經典は四種六巻、「已出」五巻、「未出」一巻とする。小林氏の推定する第五篇目著録經典に該當する現行本は、以下のようになる。

	第五篇目著録經典	該当する現行本
1	太上洞玄靈寶智慧罪根上品 (已出) 二卷 (『智慧上品大戒』の未出一卷)	太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經 (HY四五七)
2	太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然 (一卷)	太上洞玄智慧上品大戒 (HY一七七)
3	太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然眞一經 (一卷)	(『正統道藏』未収、早期に散失)
4	太上靈寶長夜府九幽玉匱明眞科 (已出一卷)	洞玄靈寶長夜之府九幽玉匱明眞科 (HY一四〇〇)

(三) 王卡氏の解釋¹⁰⁾

王卡氏も、第一篇目で『赤書玉訣』一卷が「卷目」で二卷に分成したと推定した上で、第五篇目については、以下のように解讀する。()内は王氏の補足。※印は王氏が「篇目」を「卷目」に修正したことを示す。

1. 『智慧上品大戒』三卷、二卷已出。

※「卷目」云、『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』二卷、未出一卷。

2. (ここに錯字と漏字あり)「卷目」云、『太上洞玄靈寶智慧上品大戒』、『威儀自然』二卷、已出。

3. 一「卷目」云、『太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然眞一經』。

4. 一「卷目」云、『太上靈寶長夜九幽府玉匱明眞科』。

このように解讀した上で、王卡氏は、第五篇目については、四種¹¹⁾計六卷、「已出」五卷、「未出」一卷の經典からなるとし、以下のように經典とその卷数の内訳を示す。

1. 『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』三卷、「已出」二卷、「未出」一卷

2. 『太上洞玄靈寶智慧上品大戒』一卷

3. 『太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然眞一經』一卷

4. 『太上靈寶長夜九幽府玉匱明眞科』一卷

上記の王卡氏の讀解に基づく第五篇目の經典の種類、及び「已出」・「未出」卷数の内訳は、小林氏が算出した結果と同じである。王卡氏の推定する第五篇目著録經典に該当する現行本は、以下のようになる¹²⁾。

(4※については、注 11 参照のこと。)

	第五篇目著録經典	該当する現行本
1	太上洞玄靈寶智慧罪根上品 (已出) 二卷	太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經 (H Y 四五七)
	(『智慧上品大戒』の未出一卷)	太上洞玄靈寶上品大戒 (H Y 四五四)
2	太上洞玄靈寶智慧上品大戒 (一卷)	太上洞玄智慧上品大戒 (H Y 一七七)
3	太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然眞一經 (一卷) (『威儀自然』二卷已出の内の一巻)	(敦煌本『太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然眞經』)(『正統道藏』未収)
4 ※	太上靈寶長夜府九幽玉匱明眞科 (一卷) (『威儀自然』二卷已出の内の一巻)	洞玄靈寶長夜之府九幽玉匱明眞科 (H Y 一四〇〇)

(四) 劉屹氏の解釋

第五篇目についての最も新しい研究が劉屹氏の研究であるが、氏は前掲の大淵氏や小林氏の第五篇目の讀解は讀み方が不正確であり、大淵氏の巻数の不一致も讀みの不正確なことに起因すると指摘し、以下のように讀むべきであるとする¹³。() 部分は、原文には無く、劉屹氏が補って讀んだ部分及び補足説明である。

1. 『智慧上品大戒』三卷、二卷已出。「卷目」云、『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』二卷。
未出一卷、「篇目」云、『太上洞玄靈寶智慧上品大戒』。
2. 『威儀自然』二卷、已出。
一「卷目」云、『太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然眞一經』。
一「卷目」云、(『太上洞玄靈寶黃籙簡文三元威儀自然眞一經』)。
3. (前の部分欠落)『太上靈寶長夜九幽府玉匱明眞科』。

劉屹氏は第五篇目に見える「篇目云」は「未出一卷」の「篇目」の經典を示しているとし、それが『太上洞玄靈寶智慧上品大戒』で、「卷目」の誤記ではないとする。また、このような變則的な記述について、この「未出」一卷に『太上洞玄靈寶智慧上品大戒』という長い經典名が

與えられているのは、既に人の世に流傳していた爲であると説明している。劉屹氏のこの読み方に従うと、第五篇目著録經典は三種、卷數の内訳は「已出」五卷、「未出」一卷の計六卷で、卷數は目録にある「右一部六卷第五篇目」と一致する。劉屹氏の解釋では、第五篇目著録經典に該當する現行本は、以下のようになる。

	第五篇目著録經典	該當する現行本
1	《『智慧上品大戒』已出二卷》 太上洞玄靈寶智慧罪根上品 二卷	太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經 (HY四五七)
	《『智慧上品大戒』未出一卷》 太上洞玄靈寶智慧上品大戒 一卷	太上洞玄智慧上品大戒 (HY一七七)
2	《『威儀自然』已出》太上洞玄靈寶金 籙簡文三元威儀自然真一經 (一卷)	《『正統道藏』未収、完本存在せず)
	《『威儀自然』已出》太上洞玄靈寶金 籙簡文三元威儀自然真一經 (一卷) (補足)	
3	太上靈寶長夜府九幽玉匱明真科 (一卷)	洞玄靈寶長夜之府九幽玉匱明真科 (HY一四〇〇)

第三節 諸先學の第五篇目解釋の檢證

前節で挙げた諸先學の第五篇目の解讀内容を見ると、どの研究でも解釋が一致しているのは、以下の點である。

1. 『智慧上品大戒』(篇目經題) 三卷の内、已出が二卷、未出が一卷であること
2. 『智慧上品大戒』已出二卷が、『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』二卷であること
3. 『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』二卷に該當する現行本が、『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經』上下二卷(HY四五七)であること
4. 『太上靈寶長夜府九幽玉匱明真科』の現行本が、『太上靈寶長夜之

府九幽玉匱明真科』一卷（HY一四〇〇）であること

即ち、第五篇目の「太上洞玄靈寶智慧罪根上品二卷」の後の「未出一卷」から「卷目云太上靈寶長夜府九幽玉匱明真科」より前の部分の解讀については、解釋が一致していないことが判る。そこに見える解釋の問題は、本稿冒頭に挙げたように大別して三點ある。以下、それらの問題に関わる諸先學の解釋について考察していく。

（一）第五篇目の著録經典の卷數の問題

前掲の諸先學の第五篇目の解釋において、その篇目、已出・未出の卷數が、敦煌本「靈寶經目錄」の數と合致しないのは、大淵氏の解釋のみである。敦煌本「靈寶經目錄」では、「右一部六卷、第五篇目」とあるので、第五篇目の「篇目」は六卷、その已出經典の卷數は、已出經典全部の卷數二十一卷から第五篇目以外の篇目部分の已出經典の合計數（分卷による増卷分は含まない）十六卷をひいて五卷、未出經典の卷數は未出十五卷から同じく他の篇目部分の未出經典の合計數をひいて一卷である。この數を四氏の解釋によるそれぞれの經典卷數と照合すると、以下の表ようになる。（敦煌本「靈寶經目錄」の數と合致しないものは太枠で囲んで示した。）また、四氏共に二十三卷の増卷分について、その内の一巻は『赤書玉訣』の分卷を前提としている。

	篇目卷數	已出卷數	未出卷數	敦煌本「靈寶經目錄」との照合
大淵忍爾	七卷	五卷	二卷	不一致、篇目・未出各一卷多い
小林正美	六卷	五卷	一卷	合致
王卡	六卷	五卷	一卷	合致
劉屹	六卷	五卷	一卷	合致

大淵氏は不一致をテキスト自体の誤記の問題とするが、他の三つの解釋では同じテキストを用いて敦煌本「靈寶經目錄」の卷數と合致する結果を得ているので、卷數の問題については、テキストの讀み方の違いに起因するものと推察される。

（二）第五篇目の著述經典の種類

諸先學の解釋では、第五篇目のテキストの読み方の違いにより、著録する已出經典の種類が、四種と三種に分かれる。この違いは、第五篇目テキスト中の「太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然二卷」をどのように句切るかによって生じたと考えられる。大淵氏と小林氏は、『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』を一つの經典名と解釋する。前節で表にして示した、それぞれの解釋の内容をみると、大淵氏と小林氏は「篇目」四種、已出經典名で示すと、1.『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』、2.『太上洞玄靈寶智慧上品大戒』、3.『太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然眞一經』、4.『太上靈寶長夜府九幽玉匱明眞科』で共通する。但し、これらの經典の已出・未出の卷數は兩氏で一部異なる。更に、王卡氏と劉屹氏は、「篇目」三種とする読み方をしている。即ち、『智慧上品大戒』、『威儀自然』及び經題不明の「篇目」が一つの計三種であり、「太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然二卷」の部分を『太上洞玄靈寶智慧上品大戒』と『威儀自然』の二つの經典名と解釋する。但し、同じく『威儀自然』二卷と読む王卡氏と劉屹氏も、「篇目」とする『威儀自然』に對應する已出經典が異なる。王卡氏は、『威儀自然』二卷の已出經典を『太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然眞一經』、『太上靈寶長夜府九幽玉匱明眞科』とし、已出經典は四種と見るが、劉屹氏は『太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然眞一經』、『太上洞玄靈寶黃籙簡文三元威儀自然眞一經』の二卷とし、『太上靈寶長夜府九幽玉匱明眞科』は經典名不明の別の「篇目」の經典に對應する經典と考える。これも、テキストの読み方によって生じる解釋の違いと言える。その中で、敦煌本「靈寶經目錄」の數と一致しない大淵氏の解釋は、テキストを「太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然二卷已出一卷」で句切り、『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』は二卷で、その内、已出一卷、未出一卷とした読み方の爲に、已出一卷と未出一卷が、敦煌本「靈寶經目錄」の示すそれぞれの卷數より多い結果になったと考えられる。

（三）第五篇目「未出」一卷の考察

ところで、劉屹氏のみが第五篇目の「未出」一卷の經典について、獨自の解釋をしている。即ち、劉屹氏は第五篇目の『智慧上品大戒』三卷を「已出」の『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』二卷と、「未出」の『太上

洞玄靈寶智慧上品大戒』の一巻とし、前者は現行の道藏本『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經』（HY四五七）二巻、後者は道藏本『太上洞玄智慧上品大誡』（HY一七七）が該当する經典であるとする。しかし、『太上洞玄靈寶智慧上品大戒』について、「未出」とされながら既に世に行われていた經典名を著録したとするのは、「紫微金格目」に見える「已出」、「未出」の記載の原則を無視した読み方であり、何故、そのような例外的な解釋が第五篇目にのみ成り立つのか、その説明が必要であろう。劉屹氏は『太上洞玄靈寶智慧上品大戒』に該当すると考えられる道藏本『太上洞玄智慧上品大誡』（HY一七七）が後出であることを、『智慧上品大誡』の已出二巻に該当するとされる『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經』（HY四五七）との差異を考察することで説明しようと試みているが、そこで氏自身が指摘する¹⁴ように、『太上洞玄智慧上品大誡』（HY一七七）には、『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經』（HY四五七）に見えるものとはほぼ同文の「十二可從戒」が含まれており、この經典が『智慧上品大誡』の「未出」分として後から作られたとすると、『智慧上品大戒』という同一經典で同じ戒を重複して収める理由がわからない。また、古靈寶經にはもう一篇、戒に関わる内容の『太上洞玄靈寶上品戒經』（HY四五四）一巻があるが、劉氏はこの經典については言及していない。しかし、『太上洞玄靈寶上品戒經』（HY四五四）には、『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經』巻下と同様の形式の頌が見え、しかも戒は重複していないので、これを『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』二巻の内容を補足する『智慧上品大誡』の「未出」分として見る方が妥当であろう¹⁵。王卡氏は、この道藏本『太上洞玄靈寶上品戒經』（HY四五四）を「未出」經典としている¹⁶。筆者は、王卡氏の解釋の方が妥当であり、『太上洞玄智慧上品大誡』（HY一七七）を『智慧上品大戒』の「未出」一巻とする劉氏の解釋には、再考の餘地があると考ええる。

以上、四つの解釋の中で、現時点では小林氏と王卡氏の解釋が第五篇目に對する合理的な解釋と言える。しかし、同じテキストに對して二通りの読み方が見かけ上、成立するということは、この二つの読み方についても更に檢證が必要であることを示している。この二つの解釋では、いずれも「紫微金格目」の増巻二巻分について、第一篇目の『赤書玉訣』一巻が二巻に分成したという推定を前提としている。しかし、先に

も述べたように、敦煌寫本の第一篇目部分は欠損しており、そのような分巻が「紫微金格目」に記載されていたかどうかを敦煌寫本から確認する方法は無い。また、『赤書玉訣』は「靈寶中盟經目」¹⁷で二卷になっているが、敦煌本「靈寶經目錄」中の『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』二卷は、『太上洞玄靈寶上品大誡罪根經』一卷となっている。この例から見ると、「靈寶中盟經目」が敦煌本「靈寶經目錄」中の卷數を全て忠實に反映させているとは言えず、「靈寶中盟經目」の卷數を以て陸修靜當時の卷數を推定するのは難しいと考える。北周の『無上秘要』（HY一三〇）に引く『赤書玉訣』では、例えば卷二六には『洞玄靈寶玉訣妙經下』、卷四一には『洞玄玉訣上經』と經典の上下卷の別が記されているので、北周の頃には上下二卷本の『赤書玉訣』が行われていたことがわかる。しかし、陸修靜の『太上洞玄靈寶授度儀』（HY五二八、以下、『授度儀』と略す）には、道藏本『太上洞玄靈寶赤書玉訣妙經』（HY三五二、以下、道藏本『玉訣妙經』と略す）の上下兩卷に該当箇所のある『赤書玉訣』の引文が見えるが、『授度儀』では特に『赤書玉訣』上下卷に分けて出典を表示していないので、陸修靜の頃の『赤書玉訣』が二卷本として行われていたかどうかは、『授度儀』からはわからない¹⁸。故に、敦煌本「靈寶經目錄」で『赤書玉訣』が既に二卷本になっていたと推定することは、現時點では慎重を要すると考える。

それでは、『赤書玉訣』の分巻を前提とせず、第五篇目中の經典の卷數も誤記として扱うことなくテキストを解讀して、敦煌本「靈寶經目錄」の卷數と合致するような讀解方法はないのだろうか。そこで、以下に、そのような解讀方法として筆者が試みた方法を示す。

第四節 筆者による第五篇目解讀の試み

前掲の諸先學の第五篇目の解釋は、いずれも敦煌本「靈寶經目錄」のテキストはそのままの状態、テキストの讀み方の工夫によって内容の解讀を試みたものである。しかし、この第五篇目は、敦煌本「靈寶經目錄」の他の篇目部分と比べると、誤記や脱落などによるテキストの混亂

が甚だしい。大淵氏や劉屹氏は、これを第五篇目の例外的な記述の仕方として見ているようであるが、むしろ、目録の原本は他の篇目部分と同じ記載原則に沿って書かれていたが、書寫された時の誤記や書き洩らし等が原因となって、現存する敦煌寫本のような記述内容になった、と見る方が適切ではないだろうか。故に第五篇目の記述内容の分析を行う前に、第五篇目部分の原本の状態を他の篇目部分の記載方法を参考に復元し、その上で讀解、解釋をする必要があると考える。

(一)「紫微金格目」の記載原則

既然大淵氏が「元始舊經の經目に見える通例」¹⁹としてまとめているが、それを踏まえた上で、ここではあらためて筆者がまとめた「紫微金格目」の記載方法の原則を以下に示す。また、その前にここで第五篇目との記述方法の比較の爲に、整った体裁の記述がされている第三篇目及び第四篇目の敦煌寫本原文を、句讀を切った形で示しておく。

【敦煌寫本原文】

①第三篇目：

『空洞章』一卷、已出。「卷目」云、『太上洞玄靈寶空洞靈章』。

『升玄步虛章』一卷、已出。「卷目」云、『太上說太上玄都（玉）京山經』。

『九天生神章』一卷、已出。「卷目」云、『太上洞玄靈寶自然至真九天生神章』。

右一部三卷、第三篇目。皆金簡書文。宋法師云、合三卷、明天劫之廣枝。

②第四篇目：

『自然五稱文』一卷、已出。「卷目」云、『太上洞玄靈寶大道無極自然真一五稱符上經』。

『諸天内音玉字』一卷、已出。今分爲二卷。上、「卷目」云、『太上洞玄靈寶諸天内音自然玉字上』。下、「卷目」云、『太上洞玄靈寶諸天内音自然玉字下』。

『八威召龍經』一卷、未出。

右一部三卷、第四篇目。皆金簡書文。宋法師云、合三卷、明聖德之威風。

上の二つの箇所から看取される記載方法の原則は、次のようになる。

1. 簡潔な經典名の後に、卷數、已出・未出の別が記される。

（この經典名が、「篇目」記載の經典名とされている。「篇目」の經典名については、原則として「篇目」云、という表記はしていない。）

2. 「篇目」の經典に已出の卷がある場合、「卷目」云、として、長い經典名（卷目名）が記される。「已出○卷」の後に分卷を記述する場合もある。未出は經典名の記載無し。

（この「卷目」の長い經典名が、當時世間で行われていた經典名であると考えられている。經典名に「太上洞玄靈寶」の語を冠するものが多い。）

以上の原則は、一部に欠損や脱落²⁰がある敦煌寫本であっても、第三、第四篇目の他、第六篇目から第十篇目までの記載方法にも符合する。そこで次に、この記載方法の原則に照らして、第五篇目の原本の記載内容の復元を試みる。

（二）記載原則に基づく第五篇目の復元

上記の「紫微金格目」の記載原則に照らすと、第五篇目の記述中の卷数については、誤記、衍字等があるとせずに解釋を試みるならば、以下のように復元できよう。（）部分は、筆者の補足、※印は「篇目」を「卷目」になおした部分とそれに関連した修正部分である。先ず、敦煌寫本原文を句切ったテキスト箇所を挙げ、その後に復元した内容を示す。斜体文字の部分については、後にそれについて説明を加える。

〔第五篇目：筆者の句切り方〕

1. 『智慧上品大誡』三卷、二卷已出。

卷目云、『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』二卷。未出一卷。

2. 篇目云、『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』二卷。

3. 已出一卷、目云、太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然眞一經。

4. 一卷、目云、太上靈寶長夜九幽府玉匱明眞科。

右一部六卷、第五篇目。皆金簡書文。宋法師云、合六卷、明戒律之差品。

〔第五篇目：筆者の復元〕

1. 『智慧上品大誡』三卷、已出二卷、①未出一卷。
「卷目」云、『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』二卷。
2. (「篇目」經典名、「一卷、已出」の記載が欠落)
※「卷目」云、『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』、②二卷。
3. (「篇目」經典名欠落) 已出一卷。
「(卷) 目」云、『太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然真一經』。
4. (「篇目」經典名欠落) 一卷、(「已出」の記載が欠落)
「(卷) 目」云、『太上靈寶長夜九幽府玉匱明真科』。

右一部六卷、第五篇目。皆金簡書文。宋法師云、合六卷、明戒律之差品。

第五篇目を上記のように讀解すると、第五篇目の「篇目」は四種六卷、二番目以降の經典は、いずれも「篇目」の經典名が書寫の際に欠落したと考えられる。「紫微金格目」の記載原則に基づき復元を試みた場合も、第五篇目の四種の經典については、大淵氏、小林氏の解釋と基本的には同じであると言える。また、いずれの經典でも「卷目」名が挙げられているので、「篇目」の四種の經典全てに「已出」經典の存在したことはわかる。1の①「未出一卷」は『智慧上品大誡』の「未出」一卷のことであり、一番目の經典の「卷目」の經典名とその卷数の後に記されているが、「已出」・「未出」の別は記載原則として「篇目」の經典名の後に記されるので、原則に従って上記のように位置を変更した。また、原則に照らすと、「卷目」の直前にある卷数は「篇目」の經典の卷数を示すので、3の敦煌寫本原文の「一卷目」は、「一卷已出卷目」と書くところを「已出一卷」と書き、「卷」の字が一つ書き漏らされたと推測し、この「一卷」は「篇目」の卷数を表し、その後に本來は「卷目云」と記されていたと推定した。4については、記載原則の書き方から見て、「一卷已出卷目云」と書くところを、「已出」と「卷目」の「卷」の字が欠落していると考え、上記のように復元した。第五篇目の上記復元に基づく、「篇目」の六卷から「未出」一卷を引いた五卷が、「篇目」の「已出」經典の數と考えられる。第五篇目の「卷目」經典の卷数は全部で六卷なので、「篇目」の「已出」經典の卷數より一卷多い。つまり、

ここでは第五篇目で一卷、分巻による増巻があったと見ることができる。この内、一番目二巻、三番目一卷、四番目一卷として、「篇目」の「已出」巻数合わせて四巻が示されており、残り一卷が2の經典の「篇目」の巻数ということになる。即ち、二番目の『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』は、「篇目」では一卷本が、「巻目」で分巻して二巻になった、と考えられる。つまり、この②「二巻」については、第四篇目の『諸天内音玉字』の例に従えば、「篇目」の巻数を「一卷、已出」と記した後に「今分爲二巻」と記されるところを、おそらくは前に記した「篇目云」に續けて『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』という「巻目」の經典名を書いた爲、それが書き漏らされ、この經典の當時行われていたテキストの巻数「二巻」のみが記された可能性が考えられる。

以上をまとめると、第五篇目四種全六巻の「篇目」の内訳では、「已出」五巻、「未出」一卷、その内、二番目の經典一卷は、「巻目」の『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』では二巻になっているので、當時存在した實際の「巻目」の經典巻数は六巻（5+1）となり、ここに一卷の増巻分があることになる。敦煌本「靈寶經目錄」の記載内容を見ると、第五篇目を除く「篇目」の「已出」經典数は計十六巻、「未出」經典数は計十四巻であるが、その内の『諸天内音玉字』は「巻目」では分巻して一卷増えている（16+1）。これに第五篇目の「篇目」の「已出」五巻、「未出」一卷、「巻目」六巻（5+1）の数を合わせると、「紫微金格目三十六巻」の「已出」二十一巻（16+5）、分巻して二十三巻{（16+1）+（5+1）}、「未出」十五巻（14+1）の記述とも巻数が合致する。つまり、『赤書玉訣』一卷が二巻に分巻して一卷増えていると推定しなくても、上記のように第五篇目の記述を復元し、「已出」經典中、分巻したのは『諸天内音玉字』と『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』の二經典であると解釋すると、この分巻で二巻増えて「二十三巻」となり、「紫微金格目」の經典全體の巻数が合致する。筆者の考える第五篇目の經典の内訳は、以下のようになる。

／	篇目	卷目
1	『智慧上品大誡』 三卷、已出二卷、未出一卷	『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』 二卷
2	(經典名欠落) 已出一卷	『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』 ※分卷して二卷
3	(經典名欠落) 已出一卷	『太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然真一經』 一卷
4	(經典名欠落) 已出一卷	『太上靈寶長夜九幽府玉匱明真科』 一卷

また、第三節に示した第五篇目の復元内容に基づき、『智慧上品大誡』三卷の内の、「已出」の『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』二卷と未出一卷、及び『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』二卷に該当する道藏本を、現時点では一応、以下のように推定している。既に王卡氏がこれと同じ推定をしている²¹。

／	卷目	現行テキスト
1	『太上洞玄靈寶智慧罪根上品』 二卷	『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經』
	(『智慧上品大戒』 已出二卷)	(HY四五七) 二卷
	(『智慧上品大戒』) 未出一卷	『太上洞玄靈寶上品戒經』 (HY四五四) 一卷
2	『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』 二卷	『太上洞玄智慧上品大誡』 (HY一七七) 一卷

上記の表に示した筆者の解讀では、2の『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』二卷に該当すると考えられる現行本は『太上洞玄智慧上品大誡』(HY一七七) 一卷である。敦煌本「靈寶經目錄」で二卷本の經典が、道藏本で一卷になっている例としては、「卷目」ではなく「篇目」の場合ではあるものの、第九篇目の『飛行三界通微内思』二卷「未出」が、道藏本では『太上洞玄靈寶飛行三界通微内思妙經』(HY一一一

○) 一卷となっており、『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』が特に例外的であるとは言えないと考える。

第五節 まとめと補足

以上、諸先學の第五篇目の内容の解釋について檢證するとともに、諸先學が試みた、第五篇目のテキストの読み方の工夫によって内容を読み解こうとした方法とは別に、第五篇目のテキストを「紫微金格目」の記載原則に基づいて、原文の復元をした上で内容を解讀するという方法を試みた。そのような解讀方法により、第五篇目については、著録經典四種六卷、已出五卷、未出一卷とし、更に『赤書玉訣』を二卷に分卷していると推定しなくても、『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』が分卷して二卷であると見ることで、『諸天内音玉字』の分卷二卷と併せて、これで敦煌本「靈寶經目錄」の「今分成二十三卷」の數字とも合致するという内容の解釋ができた。但し、この『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』の「二卷」については、先學の指摘するように「一卷」の誤記である可能性もまた否定はできない。その場合、この部分については、小林氏の解讀例のように、「卷目」の二卷の増卷分の内の一巻増卷分については、『赤書玉訣』が當時既に分卷していたと推定することになる。また、「二卷」を誤記とせず、『威儀自然』已出二卷、内訳を『太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀自然眞一經』一卷、『太上靈寶長夜九幽府玉匱明眞科』一卷として解釋する王卡氏の読み方も、小林氏と同じく『赤書玉訣』を二卷に分卷したと推定すると、敦煌本「靈寶經目錄」の卷數に合致する。この増卷分を『赤書玉訣』と推定した場合と、『太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀自然』と推定した場合とで、古靈寶經の現實の状況をいずれがより合理的に説明できるかは、今後、古靈寶經の研究が更に進んだ時點で再度檢證されるべきと考える。ここでは「紫微金格目」の記載原則に基づいて、書寫時の誤記、書洩らし等の混亂の甚だしい第五篇目のテキストの原文の復元を試み、それにより『赤書玉訣』の分卷を前提とせず、また、第五篇目に示される卷数はそのままにしても、

第五篇目部分を敦煌本「靈寶經目錄」の記述する巻数に合致する内容のテキストとして、解讀可能であることを示した。（以下に、筆者の解讀方法に基づく「紫微金格目」の巻数一覧表を附す。）

〔附：筆者の第五篇目の解釋に基づく「紫微金格目」經典巻数一覧〕

※（）内の數字は、テキストの破損・欠落の補足及び推定巻数を示す。
 ※（斜めの書體の經典名）は、その部分の敦煌寫本が破損しているため、便宜上第一篇目は「靈寶中盟經目」、第二篇目は「齋壇安鎮經目」記載の經典名を用いていることを示す。

	篇目	已出	未出	卷目	卷数
第一	(缺)	(2)	(一)	(太上洞玄靈寶五篇真文赤書)	(2)
	(缺)	(1)	(一)	(太上洞玄靈寶赤書玉訣)	(1)
	(第一篇目 計3卷)	(3)	(0)	(第一篇目：卷目合計巻数)	(3)
第二	(缺) (洞玄靈寶運度大劫經)	(一)	(1)		—
	(缺) (洞玄靈寶丹水飛術運度小劫經)	(一)	(1)		—
	天地運度	—	1		—
	(第二篇目 計3卷)	(0)	(3)	(第二篇目：卷目合計巻数)	(0)
第三	空洞靈章、1卷	1	—	太上洞玄靈寶空洞靈章	1
	升玄步虛章、1卷	1	—	太上說太上玄都(玉)京山(步虛)經	1
	九天生神章、1卷	1	—	太上洞玄靈寶自然至真九天生神章	1
	第三篇目 計3卷	3	0	第三篇目：卷目合計巻数	3
第四	自然五稱文、1卷	1	—	太上洞玄靈寶大道無極自然真一五稱符上經	1
	諸天内音玉字、1卷	1	—	太上洞玄靈寶諸天内音自然玉字上	2
				太上洞玄靈寶諸天内音自然玉字下	(増1)
	八威召龍經、1卷	—	1		—
	第四篇目 計3卷	2	1	第四篇目：卷目合計巻数	3

第	智慧上品大誡、3 卷	2	1	太上洞玄靈寶智慧罪根上品	2
五	(欠落)	(1)	—	太上洞玄靈寶智慧上品大戒威儀 自然	2 (増1)
	(欠落)	1	—	太上洞玄靈寶金籙簡文三元威儀 自然真一經	1
	(欠落)	1	—	太上靈寶長夜九幽府玉匱明真科	1
	第五篇目 計6 卷	5	1	第五篇目：卷目合計巻数	6
第	智慧定志通微、1 卷	1	—	太上洞玄靈寶智慧定志通微經	1
六	本業上品、1 卷	1	—	太上洞(玄)靈寶真文度人本行妙經	1
	法輪罪福、1 卷	1	—	太上洞玄靈寶真一勸誡法輪妙經	1
	第六篇目 計3 卷	3	0	第六篇目：卷目合計巻数	3
第	無量度人上品、(1) 卷	1	—	太上洞玄靈寶無量度人上品妙經	1
七	諸天靈書度命、1 卷	1	—	(欠落)	1
	(欠落)	1	—	太上洞玄靈寶減度五鍊生尸妙經	1
	第七篇目 計3 卷	3	0	第七篇目：卷目合計巻数	3
第	三元戒品、1 卷	1	—	太上洞玄靈寶三元品戒	1
八	宿命因縁、1 卷	—	1		—
	衆聖難、3 卷	—	3		—
	第八篇目 計5 卷	1	4	第八篇目：卷目合計巻数	1
第	導引□□□星、1 卷	—	1		—
九	二十四生圖、1 卷	1	—	太上洞玄靈寶二十四生圖三部 八景自然神真錄儀	1
	飛行三界通微内思、2 卷	—	2		—
	第九篇目 計4 卷	1	3	第九篇目：卷目合計巻数	1
第	藥品、1 卷	—	1		—
十	芝品、(1) 卷	—	1		—
	變化空洞、1 卷	—	1		—
	第十篇目 計3 卷	0	3	第十篇目：卷目合計巻数	0
	篇目巻数合計 36 卷	21	15	巻目の合計巻数	23

1 大淵忍爾：英語論文 “On ku Ling-Pao-Ching,” (the Acta Asiatica 27, The Toho Gakkai, Tokyo, 1974, pp. 35-50)。この論文はその後加筆修正を経て同氏の『道教とその經典』（創文社、一九九七年）の第二章「靈寶經の基礎的研究」として収められた。本稿では主にこちらを参照した。

2 この敦煌寫本の寫眞圖版は大淵忍爾『敦煌道經・圖錄篇』（福武書店、一九七九年）七二五頁下段～七二六頁上段に収録されている。

3 大淵忍爾『敦煌道經・圖錄篇』七二五頁下段～七二六頁上段。

4 原文は「三」とあるが、「大」の誤記。大淵氏上掲書参照。

5 原文は「王遣」とあるが、「玉匱」の誤記。大淵氏上掲書参照。

6 大淵氏一九七四年前掲論文及び前掲書『道教とその經典』第二章の二（七五～八八頁）。

7 この「篇目云」については、大淵氏の他、小林正美氏や王卡氏も「卷目云」の誤記とする。小林正美『六朝道教史研究』（創文社、一九九〇年）第一篇第三章の一四一頁及び「附靈寶經の分類表」の一八四頁；王卡「敦煌道經校讀參則」（『道家文化研究』第十三輯、三聯書店、一九九八年、一一〇～一二九頁）の特に一二八頁参照。

8 敦煌寫本では、第一篇目部分は欠損している爲、第一篇目の二番目の經典の呼稱として便宜上、『無上黃籙大齋立成儀』（HY五〇八）卷一の「齋壇安鎮經目」に見える經典名の『洞玄靈寶赤書玉訣妙經』を略した『赤書玉訣』を用いる。

9 小林正美一九九〇年前掲書、第一篇第三章の一四一頁及び「附靈寶經の分類表」一八四頁。

10 以下は、王卡一九九八年前掲論文「敦煌道經校讀三則」、特に一二八頁に基づく。

11 王卡氏は卷目の經典四種の中で、『太上靈寶長夜府九幽玉匱明眞科』を篇目の『自然威儀』已出二卷の内の一巻と考えるので、王卡氏の解讀では篇目の經典は三種となる。王卡一九九八年論文「敦煌道經校讀三則」の一二一、一二八頁参照。

12 王卡氏は、『中華道藏』第三冊の二四八頁上段で『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經』（HY四五七）二卷を「已出」、二五八頁上段で『太上洞玄智慧上品大誡』（HY一七七）一卷を「已出」、二六五頁上段で『太上洞玄靈寶上品戒經』（HY四五四）を「未出」としている。

13 劉屹論文「古靈寶經“未出一卷”研究」（『中華文史論叢』二〇一〇年、總第一〇〇期、八一～一〇三頁）、及び同氏論文「敦煌本“靈寶經目錄”研究」（『文史』総第八七輯、二〇〇九年、四九～七二頁）、「敦煌本“通門論卷下”（P2861, 2+2256）定名再議」（『文獻季刊』二〇〇九年第四期、四七～五五頁）参照。

14 劉屹二〇一〇年前掲論文、九三～一〇三頁参照。

15 本稿第二節（三）王卡氏の解釋の項を参照のこと。

16 王卡氏が點校した『中華道藏』第三冊所収の『太上洞玄靈寶上品戒經』の、二六五頁上段解説部分参照。

17 「靈寶中盟經目」：道藏本『洞玄靈寶三洞奉道科誡營始』（HY一一六）卷四、敦煌本『三洞奉道科誡儀範』P二三三七所収（大淵忍爾前掲書『敦煌道經・圖録篇』二二八頁に、その写真圖版を載せる）。

18 例えば、『授度儀』一丁bに二か所、「玉訣云」とある引文は、順に道藏本『玉訣妙經』卷下の「玄都傳度靈寶五篇眞文符經玉訣儀式」（二九b：五～六）、「元始靈寶五帝醮祭招眞玉訣」（二二b：七～八）に同文が見える。また、『授度儀』三四～三八丁にかけて見える「封策兩頭祝」の祝文は、道藏本『玉訣妙經』上卷二一～二六丁にかけて収められている「元始靈寶五帝眞文玉訣」の呪文と同文である。但し、『授度儀』中には、これらの引文について、上巻・下巻の別は示されていない。

19 大淵忍爾前掲書『道教とその經典』第二章の二。

20 第七篇目は『諸天靈書度命』の「卷目」名と、『太上洞玄靈寶滅度五練生尸妙經』の「篇目」名が書寫の際に脱落している。また、前述したように、第一篇目部分は完全にテキストが破損、第二篇目部分も一部を除きテキスト破損の為、原文の全貌は不明。

21 本稿第二節（三）王卡氏の解釋の項を参照のこと。